

進展著しい知の市場

2011年1月1日
知の市場
会長 増田 優

知の市場は、2004年に化学・生物総合管理の再教育講座として開始して以来、今年で8年目を迎える。ボランティア活動を基本とする知の市場が、ここまで継続し発展してきたことは驚きである。とりわけ、政府や大学からの資金提供などを求めず自主的かつ自発的な教育活動であることを鮮明に掲げた2009年度以降、開講拠点が長崎から仙台まで全国30箇所以上に拡大し応募者が3.5倍に急増して年間5,000名近くに達したことは、驚嘆するばかりである。

こうした量的な拡大と地域的な拡張のみならず、知の市場は質的にも大きな進展を遂げた。第1に、知の市場を活用する開講主体が多様化した。今や大学などの教育機関や国公立の専門機関にとどまらず民間の専門機関や研究所、企業や商工会議所、消費者団体や市民組織そして地方自治体や教育委員会さらには個人や個人の集まりなどに拡大した。第2に、個々人が受講者として知の市場を活用するだけでなく、企業や市民組織などが研修の場として活用することが定着した。そして第3の新しい動きとして、講義を実施することこそが最良の学習方法であるとの認識が広がり企業や個人が講師として知の市場に参加する事例が急増している。このように知の市場は教育そして自己研鑽と自己実現のための新しい社会基盤（インフラ）として地歩を固めつつある。

こうした知の市場の進展はひとえに、知の市場が掲げる「現場基点」、「互学互教」、「社会学連携」といった理念、そして、それぞれの機関や個人の自発的な参画と自主的な活動を基本に据えた運営方針が、大きな時代の潮流を先導するものであったことに拠るところが大である。さらに、知の市場は2時間授業15回2単位相当で構成する科目をひとつの括りとして開講し、受講者にはこれを纏めて履修することを求めるとともに厳しい成績評価を行うなど大学や大学院の教育と比べても遜色がない。このことも成功の大きな誘因となっている。

世界のグローバル化が進む中で、これまでの状況を踏襲するだけでは、江戸時代の鎖国状態以上の閉塞状況に日本は陥ってしまう。日本は既に30年前から幕末に続く第二の開国に臨むべき時を迎えている。時代を先導し社会を創る人材が求められている。追走（Catch Up）の時代から先走（Front Run）の時代に移った日本において最も必要とされている者は、専門家であることに満足せず社会を開拓し経営する資質を持った人材である。規範を遵守（Rule Follow）することに止まらず制度を改革し社会を変革していく規範を創始（Rule Make）する人材である。文系理系の枠に囚われることなく現実を直視し包括的な視点を持って自ら行動する人材である。こうした人材こそ日本が世界で活路を見出して行くために不可欠の要素である。

知の市場は、「現場基点」、「互学互教」、「社会学連携」という理念とボランティア活動を基本とする運営方針の下で、新しい社会基盤の構築に挑戦している。学生や院生に対する学校教育と社会人教育を切れ目なく連結する試みやプロ人材の養成と高度な教養教育を相互に補完しあうものとして接合する取り組みなど、知の市場の挑戦は時代を開拓し第二の開国を裏打ちする人材育成の新たな体制を構築するものと確信している。

知の市場の進展は、知の市場に参画する開講機関や連携機関そして講師や受講者はじめ多くの人々の尽力に負うところ大である。とりわけ、必ずしも教育を本来任務としない、或いは、従来教育に縁のなかった組織や個人がボランティア精神の下で自発的に教育に参画し自主的に活動する姿には頭が下がる。今や社会基盤として世の中に定着しつつある知の市場の使い勝手の向上を図るとともに情報開示により認識の共有化をさらに進めるために、2011年から知の市場共通受講システムを新たに導入し、加えて知の市場ホームページや開講機関のホームページを大幅に充実する。これによってボランティア精神を基礎とするこうした多くの人々の自主的かつ自発的な活動を、知の市場は一層力強く支えていく。

社会の全ての人々や組織が何らかの形で教育に関わり各々の役割を果たしながら教育を支えていく情況こそ、さらに、教育の世界と現実の世界が相互に重なり合いながら互いに理解し高めあっていく情況こそ、日本が目指す真の教育立国である。津々浦々で諸々の生業を担う社会の現場の全てが教育の現場としてもそれぞれ多彩な輝きを放つ社会の構築に向かって道を切り拓いていくことが知の市場に託されている。

知の市場は、知恵を相互に活かし合う楽市楽座であると同時に、教育を全ての人々の手に取り戻す楽市楽座でもある。便利で優しい社会の中で日本人は家畜化し、日本人の生活力の劣化と志の退化は著しい。危機的な状況である。見渡す限り続く灼熱の砂漠の中にも、周囲数百kmにわたりガソリンスタンドひとつない凍土の中にも、力強く生きる人々の営みがある。未だ地球上には多くのフロンティアが残されている。そして経済の世界にも学問の世界にもフロンティアは存在する。さらに社会のそれぞれの現場にはそれぞれのフロンティアが待っている。知の市場がそうしたフロンティアの開拓に出発する人々の拠点となれば本望である。

